

相続人の憂鬱

目次

相続人の憂鬱

5

結婚カウントダウン

253

相続人の憂鬱

早番シフトが終わり、夕飯も済ませて、お風呂も入った。ハーブティーを準備して、お気に入りの音楽を流し、昨日買ったばかりの小説を広げる。

そんな至福のリラックスタイムを邪魔するのは固定電話の呼び出し音だった。普段、あまり使うことのない固定電話が、ここ最近はやたらと鳴っている。ナンバーディスプレイを確認するまでもない。鳴らしているのはお父さんだ。無視をして済めばいいけど、ここで出なければ今度はケータイにかかってくる。それを無視すれば留守電。本にしおりを挟み、音楽のボリュームを下げると、私はため息をついてから覚悟を決めて受話器に手をかけた。

「もしもし」

『おお、響子きょうこか？』

お父さんの大きな声が受話器から響き渡る。

「はいはい。で、なんの用？」

正直、くたくたになつて帰ってきたところでお父さんの相手をする余裕はない。しかし、元気のあり余っているお父さんはそんな事情など気にすることもなく、数日置きに電話をかけてきてはさらに疲れる話をしてくれる。

『今度の休みにちよつと帰つてこないか？』

「お父さん。何度も言ってるけど、私の仕事はシフト勤務で土日休みじゃないの」

『知ってるさ。でも、休みがないわけじゃないだろう』

「二日続けて休みとかはあまりないし、一日しかない休みにそつちに帰ったら、往復だけで終わっちゃうわよ」

『親戚のほらー、小さい頃遊んでもらった、ひろ君覚えてるか？』

都合の悪いことは聞こえないふり。どうして年を取るところも自分勝手に人の話を聞かなくなってしまうんだらう。昔はもうちよつと聞いてくれた気がするのに。

「覚えてるわ。ひろ兄ちゃんがどうかしたの？」

『離婚しちゃったみたいでなー。こっちに戻ってきてるんだ』

親戚の話をするなんて、いつもの流れと違うと思つたら……、なんか裏が読めてきた気がする。

「まさかとは思うけど、今度はひろ兄ちゃんと結婚しろとでも言うの？」

『いや、まあ。久々だらうし、会つてみたらどうかと思つて。響子も三十だしなあ。ひ

る君は三十八でバツが付いたとはいえ、もう細かいことまで気にしてられないだろう』  
 来た。やっぱり……そこへ繋げる気だったのね。

「お父さん。ごめん、友達が来たみたいだから切るね」

『彼氏か？ それなら早く紹介』

「と・も・だ・ち。じゃあ、切るからね」

乱暴に受話器を戻すと、冷蔵庫からビールを取り出し、その場で一気に喉に流し込む。もちろん友達なんて来ていないし、来る予定もない。体よく電話を切るための方便。

「ぶはー」

おじさん臭いと言われても仕方がないけど、お父さんとの電話のあとには無性に飲みたい気分になってしまう。

二本柳響子（にほんやなぎきょうこ）。先月、ついに三十歳の誕生日を迎えた。そして、借金の取り立てのようなお父さんからの電話もこの日から始まった。

最初はお祝いの言葉だったが、気づけば結婚の催促となり。私に付き合っている人がいないとわかると、今度はお見合いを勧め出す始末。お父さんがしつこい理由がわかるだけに、ハッキリと断れないのがまた辛いところ。

うちの実家は新潟（やまあい）の山間にある。昔ながらの家というか、代々受け継いできた土地が

あり、うちのお父さんは本家の長男としてその屋敷と土地を相続している。そして、私は一人娘。ようするに跡継ぎなわけで、高校生ぐらいのときから婿を取るようと言われ続けてきた。

大学を卒業し、まだ純粹だった私はお父さんの期待に応えるべく、お婿さんになってくれるような彼氏を探した。一度は婚約までいったこともあったけど、家のことも含めいろいろとあって結局駄目になってしまった。その後、働いているホテルで宿泊部門からブライダル部門に転属になり、そこで目にした結婚の現実。

おかげで結婚に夢を見ることはなくなり、恋愛に対しても積極的になれなくなった。家のことがあって焦っているお父さんには悪いけど、結婚はまだまだ先になるだろう。

「……結婚かあ」

一人寂しくビールを飲むのが今の私の現実。色っぽい話もなければ、好きな人もいない。いい人がいればそりゃあ考えるけど。このままだと、いつかはお父さんに勧められるまま、お見合い結婚することになりそうな気がする。

私が働くのは都内でも結構大きめのホテル。前の仕事から転職したのが二十四歳のときで、宿泊部門のフロント業務からスタートした。去年、ブライダル部門に転属になり、今はブライダルコーディネーターとして働いている。そして、そこには天敵とも言える

人が……

「二本柳。これ、どういうことだ？」

仕事場に入るなり、不機嫌そうな顔でやってきた相手。

「どういうつて、その書類のとおりです」

目を合わせないまま、私は書類を受け取った。書類は私を受け持っているお客さんの予定表だ。なにに対しての文句なのかは想像がついている。

「神楽坂チーフはなにがご不満ですか？」

あまり挑発をしないように淡々としてみせるが、心の中ではまた文句なのかと、嘸みつきたい気分を抑える。

「この料理だよ。新郎さんのご家族は年配の方が多いから和食にすることになったんじゃないのか？」

予想どおりの指摘に、私は書類を近くのテーブルにやや乱暴に置いた。

「これはですね、チーフが席を外されたあとに新婦さんのお話を聞いて変更したんです」  
 「このお客さん、先日の打ち合わせのときに神楽坂さんも同席して料理内容やテーブルセッティングを決めた。神楽坂さんが言うとおり新郎さんのご意向で一度は和食に決まったんだけど、そのときの新婦さんの様子が少しおかしいことに気がつき、神楽坂さんが席を外したときに新婦さんの意向をもう一度聞いてみた。」

「新婦さんのほうは、和食よりもできることなら洋食が希望だったんです。でも、新郎さんのほうの事情があったからそれを我慢していたんです」

「両方の意見を全て聞き入れられるわけじゃないだろう」

「ですから、新郎さんと再度話をしていたら、和洋折衷料理に変更してもらい、新郎さんにご指定いただいた方は和食でということにしました」

この結婚式というやつは、一度でとんでもないお金が動く。式を挙げる側としてはおおよそ一生に一度のことなので、あれやこれやと希望がある。全ての希望を叶えようとするればその分出費がかさむ。希望と予算の折り合いをつけながら最高のものにするお手伝いをするのが私たちの仕事。

「本当に新婦さんの意向か？」

「じゃあ、電話で確認しましょうか？」

抑えていた感情も我慢が近い。私はこの人が相手になるとどうも我慢がきかなくなってしまう。

「そこまではいい。今後、変更があった場合はわかりやすく書いておくように」  
 「わかりました」

自分の今日の予定を確認しながらも沸々と湧き上がる怒りをどうにかなだめる努力をする。私の天敵、神楽坂翼。私より一つ年上で、フロント時代にも一緒に仕事をしていた。

どういうわけだか、ことごとく意見が対立する。多分、馬が合わないってやつだ。

神楽坂さんが宿泊からブライダルへと移ったときには喜んだものだけど、また同じ部門になってしまった。さらに向こうはチーフに昇進。私の上司ってわけだ。自分のペースを崩さないところもなんだか気に食わない。ポーカーフェイスで気取っちゃって。どこで恨みを買ったのか覚えていないけど、絶対に私は神楽坂さんから嫌われている。

「二本柳さん、お客様が見えました」

「はい、行きます」

バックヤードにさっきまでの嫌な気持ちを置いて、笑顔で表へ出た。

「こんにちは」

私情は仕事に持ち込まない。幸せの門出に私が水をさすわけにはいかないんだから。

「ありがとうございます」

二人が笑顔で会釈するのを見送り、ほっと安堵して肩の力を抜く。多くの新郎新婦さんはつつがなく打ち合わせを進められるが、中には揉める方もいる。新郎新婦さんの意見の食い違い、両家のご両親の意見、マリッジブルー。理由をあげればキリがない。

それにしてもだ。神楽坂さん……、人の打ち合わせを見張るように背後からチラチラと。そりゃあ、ここでの私のキャリアなんてまだまだでしょうけど。なんだって目の敵にさ

れなきやいけないのよ。

この日は三組の打ち合わせと、その合間に近々行われるブライダルフェアの準備。二十時までの勤務だけど、既に時計は二十二時を指している。この時間になると、一人、また一人と帰りの支度を始める。でも、ブライダルフェアの準備はもう少し詰めておきたい。そうでないとギリギリになって残業するハメになりそうだし。明日の出勤はゆっくりだからもうちょつとがんばっていこう。

「おー、二本柳。根詰めすぎるなよ」

軽くポンと頭を叩かれて反射的にその手を振り払ってしまう。

「やめてください」

子供扱いして。もう三十を過ぎてるのに、上司に頭を撫でられて喜ぶわけがない。それともわかってやっている、嫌がらせ？

「その気の強さで客に接するなよ」

「ご安心を。相手によって使いわけてますから」

たっぷりと嫌みを込めて、あなただけにこんな態度なのよ、と言外に含んでみた。「まあ、二本柳は仕事に私情を持ちこまないだろうけどな」

余裕たっぷりで、こっちの嫌みなど気にもしない。他の人から神楽坂さんの悪評は聞かない。彼が移ってきてからブライダル部門へのクレームが減っているらしい。その能

力を認めてはいるが、どうも新婦さんに対しての配慮が足りない気がする。

「チーフもそろそろ帰ったらどうですか？」

この人は、残業がデフォルトになっているみたいで、遅番でも早くに来ていて、夜は遅くまでいる。各人が担当しているプランのチェックをしたり、結婚式にも顔を出したり。よく働いているのは認めるけど、下に任せていけないと、いつかは自分の首を絞めることになると思う。

「そうだな。そろそろ帰るよ。もう、残っているのは俺と二本柳だけみたいだし」

神楽坂さんは自分の肩をトントンと叩きながら、バサリと書類の束をデスクに置いた。疲れているのが見て取れる。私がつまづき仕事ができるようになれば神楽坂さんの負担を減らすことはできるだろうけど。まだまだ神楽坂さんに敵わないことはわかっている。周りを見れば、神楽坂さんの言葉どおり残っているのは二人だけになっていた。私もあとちょっとしたら帰ろう。

その後、帰ると言った神楽坂さんもすぐには帰らず、二人だけの時間が静かに流れる。お互いに黙っていれば揉めることもない。なぜ仕事の話になるとあれだけ衝突してしまふんだらうか。

部屋の静寂を唐突に破ったのは一本の内線電話。二十時までの営業時間を過ぎると、

ブライダル部門に外線は入らなくなる。一緒に残っているのがチーフである以上、電話を取るの私の仕事だ。

「はい。ブライダルです」

『あ、いたいた。二本柳さんに外線です』

「……はい」

内線電話の相手は以前一緒に働いていたフロント業務の子。だから、声だけで私だとわかったんだらう。それにしても、こんな時間にわざわざ外線が入るのは普通のことではない。少し緊張して電話が切り替わるのを待った。

「はい、二本柳です」

誰からなのかは聞かなかったけど、お客様がわざわざこんな時間にかけてくるとなればなにかがあったのかもしれない。

『よかったあ。響子』

ガクリと力が抜けるのを感じた。

「ちよっと、お母さん。なんでここに電話かけてきてるのよ」

『だって、響子のケータイ通じなかったからー』

仕事場にいるときは電源は入れているものの、音もバイブもオフにしてある。ケータイにかかってくる緊急の用事なんて、そう頻繁にはないわけだし、仕事のことなら仕事

場にいれば片付くはずである。……あれ、今まで職場に電話してきたことなんてあった？  
「お母さん、なにかあったの？」

そうだ、緊急でもない限りは仕事場に電話なんてしないはず。一瞬、背筋がゾクリとして受話器をしつかりと握りしめる。

『響子。落ち着いて聞いてね』

嫌な前置きをする。その言葉で緊張度はさらに増す。お母さんはあまりもつたいぶつた言い方をするほうではない。それが、こんな言い方をするのは……

『お父さんが交通事故に遭って、今、病院で手術中なの。その……意識がなくて』

『嘘……でしょう。だって、昨日も電話で話したのよ』

すぐには信じられない。だって、丈夫が取り柄みたいな人で、定年を過ぎてからも毎年の健康診断には行っていて、悪いところなんて聞いたことがなくて……。車なんて、ゴールド免許で安全すぎてイライラするぐらいの運転なのに。

『響子。落ち着いて。お母さんもまだ信じられないのよ。これから来れる？ もうこの時間じゃ無理かしら……』

嘘……。お父さんが事故なんて。意識がないなんて……。受話器の向こうのお母さんの声が遠のく。足元が泥になったように体が重く感じられ、その場にしゃがみ込んだ。

『響子？ 響子っ！』

呼びかける声が耳に届くのに、一度手から離れた受話器が怖くて触れない。手足が震え出し、頭が真っ白になってゆく。

「二本柳、どうした？」

目の前で神楽坂さんが受話器を拾い上げて、私に渡そうとしている。ちゃんと聞かないといけないのに、私はそれを受け取れない。

しばらくすると、神楽坂さんが電話口で会話をしているのがわかった。私の代わりにお母さんの電話に出てくれている。

ガチャンと受話器が置かれた音がして、はっと顔を上げた。いつになく真剣な顔をした神楽坂さんが私の前に立っている。

「二本柳。話は聞いた。しつかりしろ、親父さんは大丈夫だ。お前がそんなんでどうする？」  
叱責の言葉に私はビクッと体を震わせてしまう。

「どうしよう。行かないと……、お母さん。一人で心細いはずだから……」

動揺しながらも、しつかりしないとけないという気持ち少し芽生えてくる。親戚は近くにたくさんいるからすぐに駆けつけてくれるだろうけど、家族はお母さんと私しかない。時計を見れば二十二時半。実家に帰る電車はとつくになくなっていく。

「二本柳」

もう一度、名前を呼ばれて肩を掴まれる。まっすぐに私を見下ろす神楽坂さんがそこ

にはいて、一瞬だけ、時が止まったように見つめ合ってしまった。

「実家はどこだ？」

「新潟です……」

「この時間だともう新幹線もないな……体力に自信はあるか？」

「はい？」

唐突に意味のわからない質問が投げかけられた。なぜ、ここで体力が出てくるわけ？

「どうだ？」

「えっと、多少なら……」

これでも、高校、大学とテニスをしてきている。今は仕事が忙しくてそれどころじゃないけど、就職してからも暇を見つけてはやってきた。だから、多少なりとも体力はあるほうだと思っている。

「よし、ここで少し待っている。このまま実家に帰ると不都合なことはあるか？」

実家に帰れば、私の部屋はそのままにしてあるはずだし、いちいち荷物を持って帰るのが面倒だからある程度の着替えもある。手ぶらで行ったところで問題はなけれど。

「特に問題はない……ですけど」

「じゃあ、すぐに戻るから」

それだけ言うと、神楽坂さんはすぐに部屋から出ていってしまった。床にへたり込ん

だままの私はその場でしばらく呆然としてしまう。なにが起きているんだろう。お父さんは大丈夫かな？ 大丈夫だよね……

部屋に一人になると、どうしようもない不安が押し寄せてくる。時間差で溢れ出した涙を堪え切れず、しばらくその場でうずくまっていた。しかし、いつまでもそうしているわけにはいかない。明日の朝一で新潟に帰らないといけないし。神楽坂さんがなにをに行ったかはわからないけど、帰る準備をしよう。

更衣室で着替えを済ませて、とりあえずは神楽坂さんが戻るのを待つことにした。まんじりと時計を眺めていると、二十三時過ぎに扉が開いた。

「遅くなった。悪いがこれを着てくれ」

大きな紙袋を渡されて中を覗いてみれば、メッシュのジャージみたいのが入っている。「なんの冗談ですか？」

今は夏である。夜とはいえ、昼間の余熱が残る中、なにを好き好んで長袖なんかを着なくちゃいけないのか、全く意味がわからない。

「ジーンズで助かった。一応、ズボンも準備したが、急だしサイズがわからなかったから」こちらの戸惑いなど気にもせず、神楽坂さんは着替えを急かしてくる。

「いや、だからなんでこれを着ないといけないんですか？」

「親父さんのところに行きたくないのか？」

「行きたいですよ！」

「だったら、送っていつてやる。すぐ出るぞ」

力強い言葉に息を呑む。この時間だと車だろうか。でも、神楽坂さんに私を送っていき義理なんかはないはず。仕事場のただの上司で、仲がいいわけじゃない。むしろ険悪なぐらい。

でも、なぜか私は反論をせずに頷いていた。やや大きめのメッシュの上着は中になにか入っているようで、羽織ってみると肩幅が広がった感じがする。

「あと、これ付けて」

渡されたのは小さなイヤホン。エレベーターを降りて、エントランスに出ると車寄せに大きなバイクが一台停まっている。そして、神楽坂さんは間違いなくそのバイクに向かって歩いていく。

「まさか……」

「ああ、バイクなら車より早く着く。ただし、後ろに乗るほうにも負担はあるけどな」

だから体力がどうか聞かれたわけだ。それにこのメッシュみたいなのはライダージャケットだ。

バイクの後ろには一度しか乗ったことがない。街中をちょこっと走ったぐらいだったから、そのときには快適だと思わなかった。しかし、新潟まで行くとなると話が違う。

「さっきのイヤホン。あれで会話ができるから。それと、首都高は二人乗りで乗り入れできないからしばらくは下道したみちでゆつくりと走る。できればその間に慣れてくれ」

テキパキと神楽坂さんはバイクに乗る上での注意点を述べていく。狐につままれた気分話を聞きながら、本当に送ってもらっていいのだろうか、という疑問が再び頭を掠める。

「やっぱり、私。明日の」

「後悔したくないだろ」

まだだ。有無を言わせない力強さ。そりゃ、後悔なんかしたくない。一刻も早くお父さんのものに駆けつけたい。その気持ちに嘘はないけど、神楽坂さんにごここまででもらっていいのだろうかちゆうちよと躊躇ちゆうちよしてしまう部分がある。だが、

「俺のことはいい。行くぞ」

という彼の言葉とともに、ボンと投げられたヘルメットを受け取ると、細かいことを気にするのをやめた。

数時間後、自分の判断を少し後悔しながらも私は必死で神楽坂さんに言われた乗り方を頭の中で反芻はんすうしていた。

「あと少しで高速降りるからな」

「はい」

腿ももの痺れを我慢しながら、あと少しで実家にたどりつくことに安堵を覚えた。高速に乗ってから二回ほどの休憩を挟んだものの、かなりの強行軍でここまでやってきた。多分、神楽坂さんのバイクの運転は上手いほうだと思ふ。それでも、長時間バイクに乗り続けることは体力的にかなりの負担になる。これは運転している神楽坂さんにも言えることだと思ふ。一人ならまだしも後ろに私がいることで普段よりも気疲れするだろうし。高速を降りてしばらくすると、見慣れた通りが見えてきた。

「この辺からならわかります」

「じゃあ、ナビしてくれ」

実家までの道のりを案内する。家が見える通りに出ると不思議な感じがした。バイク

で来たことがないせいだろうか。

一人で向かっていたら不安に押しつぶされていたかもしれない。でも、神楽坂さんが一緒だったことと、よくも悪くもバイクで来たということまで気が紛れていた。

いつもなら夜には閉じられている重厚な木の門。それが今は開いている。バイクに乗ったまま敷地内に入ってみると、中には数台の車。多分、お父さんのことで集まった親戚の車だろう。建物の近くまで行き、バイクが停まると、まず先に神楽坂さんが降りる。そして、そのあとに私。

「うわっ！」

ふらつく足のせいで、降りた直後にバランスを崩す。倒れると思った瞬間に、大きな腕に包まれていた。

「大丈夫か？ よくがんばったな」

その場に他の人はいないから当たり前のことなんだけど、腕の主は神楽坂さんだった。私をちゃんと立たせたあとに大きな手で頭を撫でる。

「あ、ありがとうございます」

恥ずかしさに小さくなってしまった声でお礼を言うと、この時間なのに明かりが点いている家に視線を向ける。外まで聞こえるざわめきに、家の中の人間が起きていることがわかる。多分、窓も開けっぱなしにしているんだろう。

玄関の前で、扉を開けるのをためらっていると、そつと背中を押された。神楽坂さんに促されて扉を開ける。ざわめきが一層大きくなり、その中に笑いが混じっているのが聞き取れた。

「ただいまー！」

少し大きめの声を出して一歩中に入ると、大広間に通じる襖ふすまが開き中から叔母さんが出てきた。

「あらー！ 響子ちゃん。今日はもう来ないと思ったわよ」

父の妹にあたる叔母さん。親戚のほとんどがこの近所か、遠くても同じ県内に住んでいる。なにかがあればすぐに集まれる。

「あの、お父さんは？」

「さっきまで、みんなで病院にいたの。手術が終わって無事よ」

「本当に？」

「本当よー。もう、兄さんも人騒がせよねー。信子のぶこさんはあとちよつとで帰ってくると思うけど」

信子さんというのは私のお母さんだ。

移動の疲労と安堵から、足の力が抜けて座り込みそうになる。しかし、崩れる前に背後からがっしりと支えられた。

「大丈夫か？」

またもや神楽坂さんに助けられた。情けないことに腰が抜けたみたいで、立ってられない状態になっている。

「すいません」

「あら、あらあらあら。ちよつと……」

叔母さんの目が私を通り過ぎて、神楽坂さんに向けられる。そして、くるりと踵かかとを返すと大広間に顔を突っ込んだ。

「ちよつと、響子ちゃんが彼氏連れてきたわよー！」

「んなっ！ ま、待って！ 叔母さん」

私の声など聞きもしない。奥の大広間から歓声のようなどよめきが玄関まで聞こえてきた。すぐにも行って訂正をしたいところなのに、悲しいかな、自分一人では身動きが取れない。

靴を脱いで、メッシュのライダージャケットを脱いで。神楽坂さんに助けってもらって大広間に顔を出すと、なにかを期待するような視線が一斉に飛んできた。

「あのね、この人は上司であつて」

大広間にはお父さんとお母さんの親戚合わせて二十名近くがいる。

「ほー、響ちゃんは仕事場で見つけたんかい」

「だから、違うつてば」

「もう、照れなくてもいいから。こんなときだからこそ連れてきたんじゃないの？」  
 多勢に無勢。いくら私が反論しても神楽坂さんに支えられた状態ではあまりにも説得力がない。しかも、テーブルを見るとビールの缶や日本酒の瓶。親戚が集まればありがちな酒盛り。口々にあれこれと言う親戚連中に抵抗するのを諦めて、ちらりと神楽坂さんを見上げると、さすがに苦笑している。

「すみません」

「いや、まあ。仕方ないだろう」

なにか小言の一つぐらい言うと思ったのに、あっさりとした返事に驚いた。

「それよりも、親父さんが無事でよかったな」

「……はい」

勝手に盛り上がる親戚を放っておいて、神楽坂さんに台所のほうへ連れていって貰い、そこでイスに下ろしてもらおう。広間に腰を落ちつければ恐ろしい質問攻めが待っているのは必然だ。私一人ならまだしも、神楽坂さんまで巻き込むわけにはいかなかった。「ただいま」

ほっと一息ついたところで、玄関からお母さんの声が聞こえた。

「お母さん！」

大広間に行かれる前にといい、台所から大きな声で呼ぶと、お母さんはこっちへ来てくれた。

「響子。帰ってきたの？ ああ、表のバイク……」

あまりの言いようがっくりとするけど、そこは聞き流しておこう。

「お父さんはどう？」

「あら、聞いてないの？」

ちらりと視線を向けた大広間。

「聞くには聞いたけど、その、詳しくは聞けなくて」

すぐに関心が神楽坂さんのほうに移って、お父さんの話どころではなかったのだ。

「うん。肋骨が折れて、ちょっと内臓を傷付けちゃったみたいなの。あとは足を骨折。

他は擦り傷とかがね。でも、手術も無事に終わって、今は麻酔でぐっすり寝てるから大丈夫じゃないかしら」

思ったよりもお母さんがしっかりしていることには安堵した。しかし、お父さんの状態は聞くだけでも痛々しい。こうしてお母さんが帰ってくるぐらいだから大丈夫なんだろうけれど、やっぱりちゃんと見るまでは安心できない。

「で、そちらは？」

奥のイスに座っていた神楽坂さんはすっと立ち上がった。

「あ、えっと。仕事場の上司で、神楽坂さん。今日はここまで送っていただいたの」  
「まあ、じゃあ。あなたが電話の」

顔をほころばせたお母さん。どうやら、職場にかけてきた電話で挨拶を済ませていたらしい。

「はい、先ほどはどうも。二本柳さんの上司で神楽坂と言います。お父様は無事ですねによりでしたね」

営業用を思わせるにこやかな対応ぶりにお母さんは恐縮して頭を下げる。

「もう、響子を取り乱してしまってますいません。会話の途中で返事もなくなるものだから……。その上ここまで送っていただくなんて……。なんと言っているのか」

「いえ。突然のことで、二本柳さんも気が動転してしまっただけでしょう。仕方ありませんよ」  
私に話しかけるとときには見せたことのない爽やかさで受け答えをする神楽坂さんを見て、私は恩も忘れて不気味さに警戒をしよう。

「それで、叔母さんたちがちょっと勘違いしちゃって……」

なにに対しての勘違いなのかを濁してしまっただけがわからなかった。ここで、ちゃんとお母さんにだけはただの上司と部下の関係であると言っておけばよかったのに。

「あらー、信子さん。お帰りなさい」

さっきの叔母さんが台所に顔を出してしまった。

「すいません。おうちのほうを任せてしまって」

「いいのよ。それよりもっ！ 響子ちゃんったら、彼氏いたんじゃない。わざわざこんな夜中に来てくれるなんて優しい人よね。これで兄さんも安心ね」

「そうなの？ 今までそんな話一言も……。まさか神楽坂さんが？」

「ちがつ……。だから」

叔母さんは私とお母さんの間に割り込み、あれやこれやと今後の二本柳家についてお母さんに語り出す始末。

「響子ったら、上司なんて紹介するから勘違いするところだったわよ。ちゃんと調べてくれなきゃダメじゃない」

あー、お母さんまで……。誤解が広まっていく。

「お話し中しません。二本柳さんも送り届けたし、私はそろそろ帰ります」

いつまでも終わらなそうなおばさん同士の会話に呆れたのか、はたまた私の彼氏にされることに耐えかねたのか、神楽坂さんはやんわりと断りを入れてきた。

「これから？ だって、外にあったバイクで来たのよね？」

お母さんは驚いて聞き返した。これから帰るのには私も驚いたけど、ここにいるのも微妙な気がする。部下の実家なんて居心地がいいとは思えない。しかも、親戚がわんさかいるときに。

「お父様も無事だったみたいで私も安心しました」  
 「ダメよ。休憩もしないで運転をして、事故にでも遭ったらどうするの？　うちで休んでからにしてください」

お母さんの顔が少し青ざめて見えた。事故<sup>事故</sup>に対しての心配ぶりは、お父さんのことがあったから余計だと思ふ。そして、それは神楽坂さんにも伝わったらしい。しばらく考えてから、

「わかりました。お言葉に甘えさせていただきます」  
 と返事をした。

「バタバタしていて大したお構いはできませんが」

お母さんに笑顔が戻り、ほっとしたところでまた問題が発生する。

「あら、でも。今日は私たちが来てるから広間は無理よね」

昔ながらの日本家屋で、平屋造りの我が家は、さきほど宴会をしていた二間続きの広間と、お父さんとお母さんが使っている部屋。それに私の部屋。さらには客間がある。あとは物置と化している離れの棟。今日来ている客人の内、数人は近所だから家に帰るだろうけど、それでも十二、三人は泊まりになる。となると、大広間と客間はその親戚たちの寝所<sup>ねど</sup>になってしまう。さすがにその中に一緒に寝てくださいとは言いがたい。

「じゃあ、私の部屋を使ってもらうから」

「まあ、響子ちゃん。さすがに結婚前に同じ部屋は……」

やたらとニヤニヤした叔母さんの突っ込みは無視しよう。私は自分の部屋を神楽坂さんに譲って、お母さんと一緒に寝ようと思ったんだから。

「あら、それでいいなら助かるわ。急なことでバタバタだったから大広間を片付けるのにいるいろと自分の部屋に放り込んで、お母さんの部屋はちらかってるのよー」

「え、違うよ。お母さん。私はお母さんと……」

叔母さんを見無視したまではよかったのに、肝心のお母さんが勘違いして変なふうになんて言ってしまった。助かるって、仮に彼氏だとしても結婚前の娘が同じ部屋で言ったらそこは止めるところでしょ。この辺は、そういう貞操観念にうるさいはずなのに。

「来ると思ってたから、響子の部屋は風通しもしてないよ。すぐに準備するわね」  
 お母さんはすぐにも台所を出ていこうとする。いやいや、待つて。これじゃあ本当に神楽坂さんと同じ部屋になっちゃうじゃないの。

「私は親戚の方と同じところでもいいですよ」

さすがにまずいと思つたのか、神楽坂さんは控えめにお母さんに進言する。神楽坂さんだって私と同じ部屋なんて御免だろう。

「あら、若いのにしっかりして。神楽坂さんならお父さんも喜ぶわね。でも、今日は口うるさいお父さんもないし、疲れているところ寝るときまで気を使わせるのも悪い

から。響子と一緒にのほうが安心するでしょう」

なんて、お門違いな配慮を見せてくれるお母さん。いやいや、神楽坂さん的には私と同じ部屋より親戚のほうを取ったんだよ。そこをくんであげて。

「だからね。お母さん、神楽坂さんは私の上司で……」

「もー、実家に来てまで固い話はなし。布団の準備してくるから」  
「それなら私がやるよ」

今日はお母さんだつて突然のことで疲れているはず。それに親戚の人たちの相手もあるだろうし、私まで手間をかけるなんて。

「いいの。神楽坂さんを一人にしたら可哀想よ」

どうしたものかと神楽坂さんを見れば、やっぱり困ったように苦笑している。

お母さんが布団を敷きに行き、叔母さんはビールを何本か取つて大広間へと戻つていく。再び台所に二人きりになると、どつと疲れが押し寄せてきた。

「なんだか、すいません。ここまで送つてもらつただけでもなんてお礼を言つていいのかわからないのに、変な誤解までされてしまい……。申し訳ないです」

いかに気に食わない相手だろうとも、ここは恐縮するしかない。二人きりになればいつもの神楽坂さんが出てきて、嫌みの一つや二つを返してくると思つていたのに。

「まあ、なにかあつて後悔するよりも、こうして来てみて安心するほうがいいだろう。

さすがに彼氏だと勘違いされたのには驚いたけどな」

「すいません。なんだか、お祭り騒ぎみたいになっていて。明日、ちゃんと誤解は解きますから。厚かましい親戚ばかりで本当に申し訳ないです。うちの親戚関係は繋がりが強いというか……」

「いや、羨ましいよ。仲がよさそうで」

そういう捉え方もあるのか。神楽坂さんの前向きな表現に、思わず唖つてしまう。そういえば、嫌みも言われない。ケンカ腰にならずにこれだけ長いこと会話が続いたの初めてかもしれない。意外と話せる人なのか。

「響子ちゃん。ちよつと手伝つて」

珍しく穏やかな雰囲気になったところで、大広間から声が届く。

「はい。すいません、ここで待つていてもらえますか」

神楽坂さんを台所に残し、大広間に行くと、一人、二人と横になつておじさんたちがいる。朝まで飲み続けるつもりかと思つていただけど限界が来たか。

「悪いけど、布団敷くのを手伝ってもらえる？」

「わかりました」

お母さんも私の部屋の準備が終わつたのか、押入れから布団を出している。流れ作業で次々と大広間に布団が敷かれてゆく。終わりが見えたところで、今度は客間のほうへ

先に移動した。

「響子ちゃん、お疲れさま」

私のあとに入ってきたのは、ついこの前お父さんとの電話で話題になったひろ兄ちゃんこと、裕之さん。

「ひろ兄ちゃんもお疲れさま。おじさんたちの相手、ずっとしてたんでしよう」

バツ一で帰ってきたとなれば、こうした集まりで格好の餌食えじきになるはずだ。私が神楽坂さんを連れてきただけであの騒ぎぶりだし。

「まあ、慣れているからね」

ひろ兄ちゃんはお父さんの従兄の息子さん。家はここから四百メートルも離れていない。そのせいで昔はしょっちゅうあとを付いて回り、遊んでもらった相手である。確か、五年前に結婚をして、奥さんがすぐにはこっちに住むのを嫌がったのもあり、東京で暮らしていたはずだ。お医者さんだからこっちで仕事を探すのも苦勞はないだろう。

「別れちゃったんだって？ お父さんに聞いたけど」

子供のころによく遊んだ相手でも大きくなつてからはそれほど交流があつたわけじゃない。たまに顔を合わせるぐらい。そういえば、結婚してからも奥さんを連れてきたという話は一、二回ぐらいしか聞いたことがなかつた気がする。

「ズバツと来るね」

もう、さつきまでイヤつてほど、聞かれたのかもしれないけど、私はまだ聞いていない。気を使つてその話題を避けるべきかとも思つたけど、お父さんが私とひろ兄ちゃんをくつつけようとしていたそぶりを思い出し、心配になつてた。私より先にひろ兄ちゃんに話している可能性は大きい。

「どうしてかなと思つて。やっぱり、結婚の継続って難しい？ あ、嫌なら答えなくていいんだけど」

世の中、結婚式を直前にやめるカップルだっているし、結婚式の直後に別れてしまう夫婦だっている。そんなのを目の当たりにする仕事柄、つい離婚の理由が気になつてしまった。

「まあ、彼女はこの土地に慣れることができなかったんだよ」

布団を敷きながらも、ひろ兄ちゃんはポツポツと語り出した。離婚したのは先月のことで、こっちに戻ってきたのは先週のことらしい。そんな最近のこととは思つてなくて、思いつきり聞いちゃったけど、悪いことしたかな。

「彼女がいいって言うまでは向こうで暮らしていようと思つただけど、一生こっちは引越したくないってさ。いつかは慣れてくれると思つていただけ、無理だつたみたいだよ」

静かな口調で語るひろ兄ちゃんは心の整理がついているのか落ち着いている。昔から、

落ち着いた雰囲気ではあったけど、こんな話をするときまで冷静でいるのはすごいと思う。

「響子ちゃんが連れてきた人。彼はお婿さんになることを了承してるの？」

唐突に自分に話題が振られて、私は手にしていた掛布団を取り落としてしまった。

「いや、あの人が彼氏じゃないし」

布団を拾い上げて、ちゃんと整えると、次の布団を取り出す。神楽坂さんが彼氏なんて、笑えない冗談よね。そりゃあ、今日のことであつと見直したけど。

「叔母さんが勝手に勘違いしたの。仕事場の上司で、たまたま残業してたときにうちのお母さんからの電話があつたものだから。私も気が動転していたから、多分、見兼ねて送つてくれただけだと思うのよ」

「でも、ただの上司が東京から新潟まで部下を送り届けるかな？」

言われて私も変だと思つた。ずつと動揺したままだったから、考えてもみなかつたけど、よくよく考えてみたらあまりないかもしれない。近隣ならまだしも、ここは新潟だ。「確かに変。でも、私つては彼に嫌われてるのよ」

「それはないだろう」

なぜかひろ兄ちゃんは面白そうに笑みを浮かべている。でも仕事場で神楽坂さんとあれだけ派手にやりあつているのは私しかない。神楽坂さんが私以外の人と口論になつ

ているのを見たことがないし、私も神楽坂さん以外の人とは口論にならない。それはつまり、嫌われているということだ。

「なんで？ 職場で犬猿の仲つて言われるぐらいなのに」

「だつて嫌いだつたら、それこそ新潟まで来ないつて。ただの仕事仲間だとしても大事な部下だと思われてることじゃないのか？」

……まさか。あの神楽坂さんに限つて、あるわけがない。

「よし、終わったかな。僕は家に帰るよ。また明日、様子を見に来るけどね。そうだ、これあげる」

ひろ兄ちゃんがお尻のポケットから財布を出す。お金でもくれるのかと焦っていたらグーに握られた手が差し出された。素直に手を出すとポンと手のひらに置かれたのは小さな四角いパッケージ。

「ひ、ひろ兄ちゃん？」

「おやすみ」

ニヤツと笑つたひろ兄ちゃんはひらりと部屋から出ていく。文句も言えなくなり、受け取つた物はそのまま乱暴にジーンズのポケットに押し込んだ。

大広間に戻ると、近くに住む親戚は既に自分の家へと引き上げていた。そして、残つた親戚は次々と布団にもぐり、眠りについていく。いろいろとあつたが、もう外は日が

昇ろうとしている。いい加減、私も眠くなってきた。

「響子。神楽坂さんを部屋に案内してあげてね」

「……はい」

「神楽坂さんもゆっくりお休みくださいね」

「すみません、お世話になります」

お母さんと神楽坂さんの挨拶が済むと、いよいよ部屋に案内することになる。もうここまで来たら仕方ない。部屋といっても八畳間だし、端に寄れば問題ない。

懐かしい自分の部屋にたどりつき、部屋の扉を開けてから電気を点けた。廊下より若干涼しいのはお母さんがクーラーを入れてくれたかららしい。そういえばお風呂も入ってないけど、もう起きてからでいいや。

「なっ！」

蛍光灯で明るくなった部屋の真ん中には二つびつたりとくつついた布団。お母さん、本当になに考えてるのよ。

「ここまでくると笑えるな」

私の背後で、部屋を見た神楽坂さんが笑いを含み、ぼそりと言う。笑っている場合じゃないですよ。ここに寝るのは私とあなたなんですから。

「今、離しますから」

「別にこのままでもいいけど。手は出さないでおこう」

「面白くない冗談ですわね」

冷やかかに言い返すと、いつもの言い合いに発展しそうな雰囲気になる。今日はいつもと違うところを見たから調子が狂っていたけど、神楽坂さんといえばカチンとくるような人なのよ。これでこそ、いつもの神楽坂さんよ。なぜか、腹の立つことを言われて安心している自分がある。

「いやいや、二本柳のお母さんには笑わせてもらってるよ」

ずかずかと私より先に部屋に入ると、ジャケットを脱いでズボンに手をかけた。

「ちよつと、なんで脱いでるんですか！」

ズボンに手をかけた格好で神楽坂さんは私のほうに振り返った。

「襲われると思ったか？ さすがに、この格好だと寝にくいからな」

ニヤリとした笑いにカーツと頭に血が上るのを感じた。ドスドスと神楽坂さんの脇をすり抜けて、自分の押入れタンスから着替えを取り出す。

「私は着替えてきますから。どんな格好で寝ようと自由ですけど、私が戻るまでに布団の中に入れてください」

貸せるような服があればいいけど、お父さんは神楽坂さんより小さいから無理だし。仕事場からそのまま来て、泊まる予定もなかったから仕方ないと思うけど、なにも私が

いる前で脱ぎ始めなくてもいいじゃないのよ。

私の部屋は家の一番奥のほうにある。廊下を曲がった先には納戸があるだけで、誰も来ないのいいことに納戸の手前で私は手早くスウェットに着替えた。

部屋に戻ると、神楽坂さんはちゃんと布団に入っていた。ただし、布団がくっついたままだったので、私は少し引っ張って一メートルほどの間をあけて布団に入った。

「別に襲うつもりはないけど、そこまでされると逆ににかしたくなるな」  
背を向けていたはずの神楽坂さんがくりとこちらを向いた。この期に及んでまだ冗談を言うつもりなのか。

「チーフが嫌いな相手にまで手を出すような人じゃないって信じてますから」  
寝ようとしたのに外が眩しい。障子の向こうに朝日が出ているのがわかる。なんとなく、神楽坂さんに背を向けて横向きになった。

「嫌いな相手って誰のことだ？」

目をつぶったところで、神楽坂さんの質問が飛ぶ。これだけ喋る元気があるなんて。眠いんじゃないのかしら。

「とほけないでください。チーフって私のこと嫌ってるじゃないですか」

「いや、嫌ってないよ。むしろ二本柳のほうが俺のことを嫌ってるだろ」

思わず鼻で笑ってしまった。じゃあ、今までの態度は一体なんだったのか説明をして

もらいたい。他の人と同じようなミスでも私がしたときはネチネチとことんやり込めてくれるくせに。

「嫌いじゃないっていうならなんで私にはあんなに突っかかってくるんですか？ フロントのときからじゃないですか」

「それを言うなら二本柳のほうだろう」

ああ言えば、こう言う。言葉の応酬おちしょうにため息が漏れる。

「じゃあ、嫌いじゃないならどう思ってるって言うんですか？」

「二本柳の仕事に対する姿勢は好きだぞ。それにブライダルには向いていると思ってる。その分の期待を含めて、つききつくなるのは認めよう」

今度も茶化されると思っていたのに、全然違う真面目な答えに戸惑ってしまった。まさか、神楽坂さんから認められているとは思ってもみなかった。いつまでも認められず、目の敵にされてるだけだと思ってたから。

「私も……、チーフの仕事は認めますよ」

ついつられて、自分まで相手を褒めるようなことを言ってしまう。いや、だって仕事はできる人なんだよ。ただ単に馬が合わないだけで。

「ほう、だとしたらどこを認めてないんだ？」

「……人間性」

部屋に妙な沈黙が落ちる。この程度ならすぐに言い返してくると思ったのに反応がない。言い過ぎたかしら。謝る……にしても、それはなんか悔しいし。

「つく……はっ！」

心配していたのに、聞こえてきたのはなぜか笑い声。なぜ、人間性を認めないと言われて笑っているの？

「二本柳ほど、ずけずけと俺に言ってくるのは珍しいよ。本当に……」

たまらずにぐるりと背後に向き直れば、お腹を抱えて笑っている神楽坂さんの姿が見えた。乱れたタオルケットからタンクトップ姿の上半身が見えている。なんか、思ったより筋肉質。いや、そうじゃなくて、なんで嬉しそうなのよ。

「もー、寝ますから。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

上司と二人きり、実家に泊まるなんて。なんで、こんなことになったんだろう。ああ、そうだお父さんの交通事故が……、お父さん大丈夫かなあ。お母さんは平気って言うんだけど、肋骨で内臓が傷付いたなんて、聞くだけでも痛々しい。それだって、ちよつとずれて心臓とかだったら？

寝る間際に考えることじゃなかった。大丈夫だとわかっていても、顔を見ていないお父さんのことを思うとよくない可能性ばかりが浮かんできて、不安になってくる。

結婚の話ばかりするから、ここ最近ちゃんと会話もしてなかった。結婚のこともいつかと先延ばししてきたけど、そろそろ本腰を入れて考えないといけないかもしれない。お父さんを安心させてあげたいし。

ひろ兄ちゃんの話じゃないけど、都内で出会ったとしても新潟まで相手が来てくれるかわからない。ただ、好きなだけじゃダメ。じゃあ、私は家のために結婚しないといけないのかしら。でも、代々続いてきた二本柳の家を私は背負っていかなければいけない。そう考えるとなんかめげてきた……

なによりも、お父さんの怪我がすぐに治ってくればいい。みんながあまりにも普通だったから勝手に安心してたけど、大丈夫だよ、お父さん。

「眠れないのか？」

私を乗せて運転してきたから疲れているはずなのに、神楽坂さんはまだ起きていたらしい。慣れない環境で寝つきにくいのもあるのかもしれない。

「ちよつと、父のことを考えていて」

それに対しての返事はなく、しんとした沈黙も不安を募らせる。嘘でもいいから大丈夫だと誰かに言っただけじゃなかった。私だって、慣れないバイクで疲れているのに、一度冴えてしまったせいか眠れない。

「大丈夫だよ」

ぎゅつと目を閉じて、不安な気持ちを振り払おうとしたところで、神楽坂さんの一言が妙に部屋に響いた。なぜだか、その一言はすとんと私の中に入って来た。なんの根拠もないはずなのに、信じてしまいたいそうになる。

あれ？　一メートル。私と神楽坂さんには一メートルの距離があつたはずなのに、今の声は近くから聞こえた気がする。

そう思った瞬間、ふわりと背後から抱きしめられた。

「チーフ？」

なんで？　神楽坂さんが……。でも、ちょっと人肌にはほっとする。やだ、なんか弱気になつてゐるのかも。相手はあの神楽坂さんなのよ。

「震えてるように見えたから」

ただ、ちょっと気弱になつただけで、震えてたわけじゃない。それなのに、このままぬくもりを感じていたい気分。

「チーフが優しい人だとは思いませんでした」

今まで見てきた数年分が今日一日で覆くつがえされている。嫌われていると思つていたらそうでもなかったり、弱つている人間を労いたわつたり。思つてた以上に人間味のある人なんだ。

「とことん、二本柳の評価は低いな」

息が、首筋にかかる。やだ、こんなの子供をなだめているのと一緒でしょ。ドキドキ

するんじゃない、私。でも、こんなふうに誰かに抱きしめられるのなんて久々で、つい身を任せたくなる。結婚に夢がなくなつたとはいえ、一人身が楽しいわけじゃない。一人でいることが寂しいと思うことだつて……

「目下、評価修正中ですけど」

スタートラインが最低だったんだから、あとは上るしかない。昨日までの私だつたら、こんなことをされた時点で平手打ちぐらいしたに違いない。

「すっかり朝だな」

「そうですね」

ぴつたり寄り添つて、障子越しに外の明るさを眺め、神楽坂さんの鼓動に安らいでいる。本当に変な状態。なんとなく、神楽坂さんに体を預けてしまう。

しばしの無言。お互いに起きていることはわかっている。ただ、静かにすずめや蝉せみの鳴き声に耳を傾けていると、不安が薄れて徐々に眠気がやってきた。

「二本柳」

名前を呼ばれて、顔だけを軽く捻ると、神楽坂さんの手が私の顎あごを捕えた。そして、柔らかい感触が唇に触れる。……キスだ、これ。

「いつもの落差がありすぎだ。なんか可愛いぞ、お前」

一度離れた唇から紡がれた言葉に固まる。私が……可愛い？　前に付き合つた人には

可愛げないと散々言われて、しまいには一人でも生きていけると断言された私が、可愛  
い？ 沢山の疑問符が頭に浮かんでいるうちに、再び唇同士が触れ合う。

やばい、ちょっと気持ちいい。

「んっ……」

体を仰向けにされ、覆いかぶさる神楽坂さんと目が合う。彼の顔がゆっくりと近づいてきて、再び口づけが繰り返される。抗おうとしたが、歯列を舐める神楽坂さんの舌に抵抗をやめ主導権を譲った。

「うんん……」

勝手な想像だけど、普段の態度とから強引で乱暴なエッチをしそうだと思っていたのに、予想に反して神楽坂さんのキスは優しくて甘い。引き込まれてしまいそうな、甘美なキス。

スウェットの上から大きな手が私の胸を包み込んでいる。もう、眠気なんて完全にどこかへ行ってしまった。流されてしまったていいのかと不安がよぎるのに、自分からは止められそうもない。

首の後ろに差し入れられた神楽坂さんの手。一層キスが深まり、考えることを放棄した。自らもキスに応じると、神楽坂さんの動きに遠慮がなくなる。

スウェットを捲り上げられると、胸が露になる。寝るつもりだったから、ブラジャー

は外していた。まさか、こんなことになるなんて思ってもみなかったし。

「くうん……」

唇が離れるとすぐに甘い声が漏れる。胸の頂を指で挟まれ、強めにいじられている。そして神楽坂さんは少し体をずらすと、反対側の胸を口に含む。

「ふあっ……んんっ」

「声……、いくらここが奥でもあんまり出すと親戚に聞こえるぞ」

「でも……」

だって、胸だけだっていうのに声が我慢できないぐらい気持ちがいい。聞こえると言っても、夜通し起きていて、寝付いたばかりの人間がちよつとやそつとのもので目を覚ますとは思えない。それでも、声を抑えたほうがいいのは確かである。

「ひあっ！」

そう思った矢先に、胸の頂が甘噛みされた。

「チー……フ……」

非難を込めた視線を送れば、仕事では見せることのないいたずらっぽい瞳がこちらを見ている。ドキッとしながらも、さつき神楽坂さんの言った『落差』という言葉を思い出す。あれって、こういうことかしら。

「結構、感じやすいんだな」

からかいを含んだ言葉にかーっと熱くなるのを感じた。そんな私の反応に満足したような神楽坂さんの顔が近付いてくる。キスされると思い、反射的に目を閉じると首筋が舐められた。

「くうん……やあ……」

鳥肌が立つほどぞくつとしながらも、もう一つ別の感覚が目覚め始める。そして、それが自分だけではないとわかる。太腿に感じるのは神楽坂さんの……

「感じて……る？」

確かめるように少しだけ腿を上げると、舌先が鎖骨へ移動し、そしてきつめに吸い上げられた。

「それは、こんな状況だからな。今更、止めるなよ」

私の控えめな探りに対して、神楽坂さんはぐいっと自分のものを押しつけてくる。止めるって……、私だって今やめられたら……困る。

神楽坂さんの首に腕を回してずっと受け身のままであった私からキスをする。それが私の返事。一瞬驚いた様子だったのに、神楽坂さんはすぐに攻めに転じた。

「んふっ……んんっ！」

食べられてしまいそうな、むさぼるようなキス。お互いがこの行為を続けることを認めてしまった。

「腰、浮かせる」

「うん……」

少し腰を浮かせると、ショーツとスウェットのズボンが脱がされる。改めて見ると、神楽坂さんはタンクトップにトランクス姿で、ジャケットはハンガーに、他は枕元に丁寧に畳まれている。

私の服を全て脱がすと、神楽坂さんは一度上体を起こしてタンクトップを脱ぎ捨てた。筋肉質な体が露になる。差し込んでくる朝日に照らされ、神々しくも見えるその裸体から目が離せない。

「見とれてるのか？」

光の加減で表情は見えないけど、たぶん余裕な顔をしているに違いない。さっきから翻弄ほんろうされっぱなしでなんか悔しい。返事をせずにぷいっと顔を横に向けると、微かに笑い声が聞こえた。

「ひゃあんっ！」

人がそっぽを向いている間に、神楽坂さんはなんの前触れもなく私の中へと指を滑り込ませてきた。突然のことに声を上げたものの、痛みはなく、するりと受け入れている。「狭いな」

知らない……、そんなの。比べたことないもの。

「でも、温かくて気持ちいい」

指全体が中に入りきると、曲げられた指先が内壁をくすぐってくる。胸とは別の快感が全身を走り抜けて、目をぎゅっと閉じた。探るような指が時折、敏感な部分を掠めて、そのたびに嬌声きょうせいを上げてしまう。

「あんっ……、くあん……」

自分でも濡れ出したのがわかる。その蜜が潤滑油の役割を果たし、神楽坂さんの指は激しさを増していく。

「いやあ……、だ、だめ……、それ以上したら……」

「これ以上したら、どうなるんだ?」

「っ……くう……」

意地悪な問いに羞恥心しゆうちしんが煽られる。指の動きが緩慢かんまんになっていき、上り詰めそうになっていたのに、波が引いてしまう。いやじゃない、あとちょっとだったの。……もつと……してほしい。

「やあ……」

目を開けると神楽坂さんは口の端を上げて見下ろしていた。

「……もつと」

神楽坂さんの耳に届くかどうかわからないぐらいの声で辛うじて言うと、意地悪そう

な神楽坂さんの表情が和らいだ。

「わざとか?」

「ん? あっ……」

首を傾げたところで、指の動きが勢いを取り戻し始める。いやおうなしに体は反応しってしまう。

「意識して誘っているのかと思ったけど、そういうわけでもないんだな」

そんなことしていない。それよりも神楽坂さんのほうが詐欺みたいじゃない。普段からは想像できないくらいの色気で、私のほうが戸惑っている。

「そろそろいきそうだろ? おしゃべりはここまでだ」

「やっ! ああ……んっ!」

いきかけたところで止められていたのだから、言われたとおりにもう限界間近。自分でも神楽坂さんの指を締め付けているのがわかり、余計に感じてしまう。

「くっ……あ……あ……いくうっ!」

宣言することなんてなかったのに、思わずその言葉を口にしてしまった。軽く痙攣けいれんを繰り返す私の中から神楽坂さんの指がゆっくりと抜けていく。私の目の前で濡れた指を舐め取ると、その唇が今度は私の唇に触れる。

久しぶりの行為に、少しの不安があった。でもそんな不安をよそに私の体は応えていた。